

北欧の旅

林 興一郎

昨年6月、北欧を旅しました。選んだのは、JTB のパック旅行。フィンランド、ノルウェー、デンマーク、スウェーデンの順に旅するものです。魅力を感じたのは、ノルウェーのフィヨルドクルーズ、オスロでムンクの絵を見ること、オスロからコペンハーゲンへの船旅、コペンハーゲンからストックホルムへの列車旅です。期待に応えてくれたのもあり、そうでないものもあり。

予備知識として、「物語 北欧の歴史」(中公新書)を読みました。この四か国は過去の歴史で、互いに激しく争い、ドイツやロシアの干渉も受けて、今の姿に至っているのが良く分かりました。通貨はフィンランドだけが、ユーロで、あとは、各国固有の通貨ですから、関空で、四か国の通貨を入手しました。また、ペットボトルは手荷物に入れられないので、スーツケースに何本か入れました。現地で、すぐに菓を飲んだりするのに、水を探し求めるのは面倒です。長い機内の時間を過ごすのに、文芸春秋のような読み物も必要です。機内で眠ると現地に着いてから、その夜、眠れないので、起きて過ごすよう努力します。さて、出発です。

H28.6.16 (木)

10 時間のフライトで、午後3時、フィンランドのヘルシンキ着。天候、雨。すぐに見物開始。岩盤をくり抜いて作ったユニークな教会を見る。丸天井は銅線を渦のように巻いてある。延べ長さは22kmだそうで、どうやって重量を支えているのか聞き忘れた。

シベリウス広場で、作曲家シベリウスの巨大な顔の像を見る。

テンペリアウキオ教会(ロシア教会)などを見て、ホテル着。通常、パック旅行で、最初に着いた日の夕食はついてないので、道を聞いて、ホテルの近くの駅の簡易食堂へ行った。店員がサンドイッチに何を挟むのか、聞きながら作ってくれた。

H28.6.17 (金)

午前8時25分、ヘルシンキ発、ストックホルム経由、午前11時30分、ノルウェーのベルゲン着。ベルゲンはスカンジナビア半島の大西洋側の港町。ベルゲンに向かって降下する飛行機からの眺めがすばらしかった。山々に残る雪、深く切れ込むフィヨルド、集落、橋などが次々に現れ、遊覧飛行のようだった。旅行仲間は、リュックスタイルが多い。気温は、肌着、綿シャツ、風よけジャンパーでOK。ベルゲンは人口25万、むかし、ハンザ同盟で栄えた港町。魚市場や坂の町で長崎の雰囲気によく似ている。三角屋根のカラフルな、高い建物が連なるブリュッケン地区は世界遺産で、格好の被写体。みんなが写真に納まる。ハンザ博物館は昔の、取引部屋、寝る部屋、倉庫などがまとまって入っていて、当時の雰囲気を伝える。サバとニシンの缶詰を買った。

ベルゲンからバスでフィヨルド沿いに走り、トンネルを抜け、橋を渡り、別のフィヨルドに枝分かれして入り、3時間後にフィヨルドのどん詰まりのウルビック（地名）にあるホテルに着く。この国はトンネルが多く、長い。トンネルを掘らないと道ができない地形だ。夕食では、隣に松山から来たという夫婦がおられ、人当たりがよく、現役では、県内だけの転勤だったと言われるので、銀行員かと推測した。話が弾み、ビールを3杯飲んだ。北欧は物価が高い。消費税の精もあろう。ビール1杯（500ml）が79クローネ（約1100円）である。

H28.6.18（土）

今日は、ホテルを出て、バスでベルゲン鉄道の山間の駅、ボスへ行く。そこから列車で、ミュルダール駅まで行き、フロム鉄道に乗り換える。フロム鉄道でミュルダール駅からフロム駅まで下る。フロムはフィヨルドの奥の港で、フィヨルドクルーズの発着港である。フロム駅まで下る時、見え隠れする谷や川や滝が見ものである。それ以上に、フィヨルドクルーズはすばらしい。船尾にノルウェーの旗をはためかせ、甲板で見る両側の切り立った絶壁、流れ落ちる雪解け水の滝が次々に現れる、その雄大さ、ソグネフィヨルドクルーズは、期待通りだった。

H28.6.19（日）

ホテルを午前6時30分に出発。今日は、スカンジナ山脈を越え、オスロに下る。気温摂氏7度。昨年まで、世界最長だったライバルトンネルを抜ける。24.5km、19分かかった。

スターブ教会に寄る。外観は板張りで、コールタールで黒く塗られている。屋根はうろこ状。1130年前後の建築で、バイキング時代の造船技術がふんだんに使われているという。峠を越える頃、なだらかな山には、雪がまだらに残っている。冬にはオスロとベルゲンの2大都市を結ぶこの道は閉鎖されるという。下る途中で、バスの運転手は35分の休憩をとる。労働の決まりでこれだけの休憩が義務付けられているという。日曜日のため、交通量が少なく、どんどん進み、オスロ国立美術館では、30分の予定が、1時間たっぷり見られた。

青の時代のピカソの絵、セザンヌ、ゴーギャンの絵を見て、ムンクだけの部屋に着き、立ち続けた。「叫び」の絵の前には、プラスチックの保護板があったが、写真は撮り放題だった。ムンクの絵はほかに10枚もあったろう。

フログネル公園も期待していた。人の一生を、生から死まで、193体の偶像で彫刻している。子供が足を踏み鳴らして怒っている「おこりん坊」、子供を4人も手足で操る男、女を抱く男、女を振り上げる男など、ずらりと通りの両側に並んでいる。一つ一つゆっくり鑑賞したいところだが、時間がない。

DSDF シーウェイズへ乗船。船室は狭い。二人のベッドと間の通路、トイレ、洗面、物置

で1セット。窓は、海に面している。午後4時半出航。甲板から去り行くオスロの町を見る。町は平たく、広い。船内はデウテイフリー。中国人らしき人で混み合う。チョコレートなどをノルウェークローネの残金とデンマーククロネで払った。去る国の通貨を残すまいとするところなる。夕食はバイキング、肉やシーフード、ビール付き。

H28.6.20 (月)

船中ではよく眠った。やっと3時、4時に目覚めなくなった。朝食後、右手にクロンボー城が見える。1585年完成で、シェイクスピアのハムレットの舞台という。写真を撮りたいところだが、撮らずに我慢。デジカメの充電器をスーツケースに入れ、スーツケースがそのまま船から、ホテルへ直行するので取り出せない。充電できない。

午前9時45分、コペンハーゲン入港。気温摂氏22度。

人魚姫の像は小さい、黒っぽい。みんな順番に写真を撮る。デンマーク王家のアマリエンボー宮殿を見る。歩行者天国マトロイエで自由時間30分。こんな短時間では、ロイヤルコペンハーゲンの本店に入っても買う決断ができない。高いし、買わず終い。

オプションツアーで、高速道をフレデリクスボー城へ行く。途中、デンマークの平原の景色を期待したが、樹木が邪魔してよく見えない。フレデリクスボー城は、デンマークで最も人気の高い王、クリスチャン4世が1620年に作らせた。湖と庭園と城が美しい。福島出身の老ガイドが東北弁でユーモアを交えて説明してくれた。

ホテルに着いて、部屋に入ったが、トイレの水がボタンを押しても出ない。部屋を替えてもらった。新しい部屋のキーを黒人ボーイが持ってきたが、ドアが開かない。フロントへ降り、パソコンで部屋のアサインをし直し、キーを受け取ったが、ボーイにちゃんと確認せよとついて来させた。

H28.6.21 (火)

雨。傘を差して駅まで歩いた。コペンハーゲン駅は内部空間が広く、暗く、人は大勢いるが、前時代の遺物という感。おまけに、出発ホームに行くのに、階段を上って、外に出、一般道を車に注意して、横切り、また、下ってホームに至る。そこでパスポートチェック。午前8時17分発。席は進行方向に向かって、右側。通路の反対側には、向かい合って、旅の仲間4人が座る。大阪の夫婦と和歌山の女連れ2人。一人の男が同中、ずっと大阪弁でしゃべり通し。しゃべり上手、聞き上手で漫才を聞いているようなもの。しまいにはうるさくなった。静かにスウェーデンの森林の景色を見るつもりだったが、景色も雨模様で、退屈な5時間半になった。

ストックホルムでは晴れた。市庁舎を見学。1階の大広間では、ノーベル賞の晩餐会、2階の黄金の間で舞踏会だそうな。広い部屋だが、参加者で一杯になるという。

夕食前に旧市街ガムラ・スタンで自由時間。旅の仲間はみんな広場のベンチに座って時間待ち。旅の終わりで、動かず、買わず。

H28.6.22 (水)

午前11時30分、ホテル出発まで、ゆっくり。行く当てもなく、ホテル近くの森と湖の公園に入る。モーターボートやヨットが浮かぶ。森の中には、ジムの道具がある。水着姿の人々が芝生の上で寝そべっている。みんな、夏至祭が近く、夏を喜んでいる。

旅の終わりの清々しい自然の風景。

翌日、朝9時、関空着。